

# 政治漫画にみる政治過程

——PKO法案における政治漫画の内容分析——

茨木正治

## 目次

### 第一章 問題の所在

### 第二章 事例研究——PKO法成立と政治漫画——

#### (1) 成立の経緯

#### (2) 政治漫画の内容分析

##### 1 分析方法

##### 1) マクロ的分析

##### 2) シンボルの(ミクロ的)分析

##### 3) 活字情報との関連

##### 2 内容分析——分析結果と考察

##### 1) マクロ的分析

##### 2) シンボルの分析

##### 3) 活字情報との関連

### 第三章 結論と展望

## 第一章 問題の所在

政治過程におけるマス・メディアの役割は、政治過程論の立場から、マス・コミュニケーション研究（特に効果研究）の立場からの双方から主に研究されている。政治過程論では、議会内の立法過程研究、政党研究、政策過程研究などにおいて、メディアによる認識枠組の形成（media imposing function）機能により、法案の成立、議会内の代議士の諸活動、官僚の性格形成でメディアが政党や官僚を規制しつつも、その実政権党や官僚が優位を保ちつつメディアを利用するという指摘がされる。<sup>(1)</sup>これに対して、マス・コミュニケーション論では、政治制度に与えるメディアの効果はかなり大きく、議題設定機能を始めとする「現実の構成」に大きく関与していると述べている。<sup>(2)</sup>いずれの場合においても、情報それ自体が価値をもつ情報化社会ではマス・メディアと政治過程の関わり合いが少なくとも認知レベルでは確実に大きくなっているといえるのである。

しかし、新聞の「政治漫画」<sup>(3)</sup>のもつ役割はほとんど検討されていない。一九五〇年代アメリカで既に「新聞の盲腸」「情性の産物」と「政治漫画」が称せられ、建国以来の伝統をもつ新聞漫画の衰退を嘆く声があった。<sup>(4)</sup>日本においても「政治漫画」の置かれている状況は良いとはいえない。政治報道の中の添え物としての地位に甘んじているのが実情である。<sup>(5)</sup>また、「政治漫画」研究そのものも社会科学においてはほとんどなされていない。<sup>(6)</sup>政治学では皆無といつてよいだろう。マス・メディアとしてテレビを代表とする映像メディアが大きな勢力を占め、その有効性が注目されている。人々の情報の入手方法が新聞・雑誌・書籍などの活字情報よりも映像による情報のほうを情報の迅速な獲得という点で選ぶ傾向がある。視覚情報は状況説明の瞬時了解が可能であり、単位時間あたりの情報量でも活字よりもすぐれているからである。<sup>(7)</sup>にもかかわらず、こと「政治漫画」に限っては関心が向けられていない。

「政治漫画」への関心の低さは、このメディア自体に内在するものと、新聞という掲載主体に存する外在的なもの

と二つの要因による。

第一に、「漫画」のもつ「解説・評論」と「娯楽」の側面が「政治漫画」の読み方に障害となっている点がある。絵画のもつ特質は現在ではその内在的思考を探索の試み<sup>(8)</sup>がなされている。しかしながら、絵画の一形式のはずの「政治漫画」においては、前に述べた「解説」と「娯楽」の要素を包摂した「戯画の文法」<sup>(9)</sup>がいまだに見出されていない。

このことは、「政治漫画」を囲む環境が複雑である第二の要因にも関連する。速報性、解説性すらもテレビ放送に奪われつつある新聞は、報道の姿勢や自らの立場を見つけられずにいる。多様な価値観が共存すると「思われている」現代の社会では、受け手をどこに設定するかに苦悩することが多い。その新聞内での「政治漫画」の役割が「文法」の曖昧さにより見えにくくなっている。

さらに「政治漫画」にとって困難な状況を作っているのは「マンガ文化」<sup>(10)</sup>と称されるような雑誌漫画の隆盛である。本来「政治漫画」と雑誌漫画はその元は一つであった。第二次大戦後、高度経済成長を経て急速に雑誌漫画は増大した。「娯楽」の側面の拡大を軸とする雑誌漫画は雑誌や書籍の大半を占めるようになり、扱う分野も多様化<sup>(11)</sup>している。この雑誌漫画の受けた「娯楽Ⅱマンガ」の社会的認知ならびに描き手の処遇の差違が「政治漫画」をメディアの片隅に追いやったのである。

「政治漫画」がメディアとしても、研究対象としてもはたして意味の無いものであろうか。むしろ「政治漫画」のもつ意義は現代では高まっている。その理由は以下の三点である。

第一に、図像がもつ特性と文字がもつ特性とを組み合わせることが「政治漫画」には可能である。全体を瞬時に把握し、人々の認知に影響を与えることにより複雑な政治現象の概観をすることができる。この特性を「政治漫画」内の文字情報や、記事・論説という「政治漫画」外の文字情報とを組み合わせることから映像とは違って持続性を生み、さらに各部分の様々な視点からの情報により当該の政治現象を立体的にとらえることができる。この点で、過剰気味

な情報の流出に一つの体系化による歯止めをかける可能性が生ずる。

第二に、受け手に対する種々の感情や印象を送り手が持たせる喚起機能に着目し、情報を曖昧なままに提示することにより多様な人々の注目を得て、多様な価値の収集に役立つ。シンボルとしての「政治漫画」のもう一つの機能である「内容の凝集機能」と関連させるならば、「政治漫画」の潜在的内容の把握が必要であり、前述した「戯画の文法」の定式化が求められることになる。

第三に、政治参加を誘うための政治認識が可能になる。マス・メディアには監視の機能があるといっても、現実には多数決原理の行使により政治過程が進められていく。それゆえ、メディアによる野党の影響力は脆弱である——と言われる<sup>12)</sup>。また、世間の常識と掛け離れ専門・分化した政治現象とその行為者の姿をメディアによって見せつけられる人々は「政治」は「見る」ものであつて「する」ものではないと思ひ込んでしまう。しかし、政治を「する」世界を支配の正当性という点で考えてみるならば、確かに多数決原理が根底にあるとはいへ、その原理を行使するまでの過程で行為の正当化を根拠づける営みをメディアを駆使して行なっていく。この営みは主としてシンボルの操作という形で行なわれるので、このシンボル操作を注視し鳥瞰図を構成しようとする試みこそ「みる政治」であり、「する政治」と切り離されたものではないのである。<sup>13)</sup>「みる政治」の手段として「政治漫画」のもつ諷刺・戯画・「笑い」の喚起などが前述した瞬時の了解とならんで有効である。

本稿では「政治漫画」の現代的意義を政治過程との関連を通して求め、「戯画の文法」を探る手掛りとすることを目的としている。事例として一九九二年六月に可決成立したPKO法の成立過程をとりあげたのは、消費税の成立と同様に、何度も国会を通し法案を修正し遂には「強行採決」を始めとする多数決原理にもとづく政治手法を駆使したという意味で「重要法案」と判断したからである。

## 第二章 事例研究——PKO法成立と政治漫画

### （1）成立の経緯

一九九二年六月十五日、衆議院本会議において「国連平和維持活動等に対する協力に関する法律」（PKO協力法）と、「国際緊急援助隊の派遣に関する一部改正案」が可決成立した。自衛隊の本格的な海外派遣を法制度上正当化し、国際貢献という点で戦後一貫してとられた「非軍事」的姿勢から大きく転換したことを表わす法案の成立であった。

PKO法が成立する過程をたどるには、一九九〇年一月一日に開会した第一一九国会から、法案が成立した第一二三国会（一九九二年一月二十四日～六月二日）の間の五つの国会ごとの推移をみる必要がある。<sup>(1)</sup> 一九九一年から第一二三の間の国会開会中の新聞掲載の「政治漫画」のPKO関連をテーマにしたものを抽出してみると、ほぼ平均頻度を超えた登場のしかたをしている。法案成立が全くの議院内の要因のみで行なわれることはまずありえない。むしろPKO法の場合、その性質上外的要因（国際関係上の出来事、世論調査など）も法案に大きな影響を与えているように思われる。したがって、第一一九国会の開催を促した原因ともなった一九九〇年八月二日のイラクのクウェート侵攻と、八月五日の対イラク制裁措置の政府発表を契機として「国際貢献」シンボルが顕在化し、PKO法の前身である「国連平和協力法案」を生み出すこととなったことを前段階として加えておきたい。<sup>(4)</sup>

第一一九国会に提出された「国連平和協力法案」は、公明・民社両党の協力を得られず廃案となったが、会期末に自衛隊とは別組織でPKOに協力することで自公民三党が合意した。この頃より公明・民社両党と自民党との水面下の接触が行なわれるようになった。次いで第一二〇国会時には、湾岸戦争が「国際貢献」の必要性和方向性を実証した形となり、社会党の護憲の姿勢が「反対のための反対」とみなされ、「体制ファンタジメンタルズ」<sup>(5)</sup>から遊離していった。

この時期に掃海艇をペルシャ湾に派遣して内外、特に国内の世論に自衛隊の海外派遣を既定コースとして認知させることに成功した政府は、一二一国会でPKO法案を初めて提案した。九一年一月、宮沢政権発足後の一二二国会では、強行採決のために若干足踏みはしたものの、翌年の一二三国会で再修正を施し、衆院解散、「同日選」をちらつかせながら公・民の支持を得、法案を可決成立させた。国会終盤の社会党らの「牛歩戦術」「議員辞職願」による抵抗も時すでに遅く、かえって対応の稚さを世間に知らしめることになり、PKO法の「現実主義的性質」のみを際立たせる結果になった。

## (2) 政治漫画の内容分析

### 1 分析方法

この研究で分析の対象とした「政治漫画」を掲載した新聞は、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、北陸中日新聞、北國新聞の五紙の朝刊ないし夕刊である。朝日・毎日・読売の三紙は縮刷版を用いた。期間は、一九九〇年八月一日から、一九九二年六月三〇日までの二三ヶ月間である。「朝日」(以下新聞をこのように略記する)、「読売」、「毎日」は中央紙として、「北陸中日」はブロック紙の代表として、また、「北國」は地方紙の代表としてそれぞれ選んだ。<sup>(6)</sup>

分析の手順としては、1) マクロ的分析、2) シンボルの分析(ミクロ的分析)、3) 活字情報との関連、と三つに大別して、それぞれの枠組に付随して生ずる枠組を設定して行なった。

#### 1) マクロ的分析

前述した二三ヶ月間にPKOに関する「政治漫画」が登場した回数を月別に抽出し、各紙との比較のためにクロス表を作成した(表2)。ただし、「一二一国会」、「一二〇国会」の時期には「国際貢献」、「掃海艇」とPKOに関連する<sup>(7)</sup>

テーマの「政治漫画」を選び分析対象とした。この分析では、PKO法案成立の推移を鳥瞰図的に示し、国会会期の関連をみるために行なった。

## 2) ミクロ的分析（シンボルの分析）

「政治漫画」の内容により細かく介入しようとしたのがこの「ミクロ的分析」である。PKO（及びそれに関連する概念）がどのような事物、あるいは人物によってシンボル化されているかを個々の「政治漫画」から読み取り類型化した。特に人物については、「政治漫画」の歴史が「戯画」と密接不可分であることから明らかに、重要な役割を果たしている。それゆえ、各紙ごと月別に個々の「政治漫画」に登場した人物の数により分類し、次いで具体的な人物の登場数をまとめた。

## 3) 活字情報との関連

本稿で述べる活字情報とは、「政治漫画」に対応する記事ならびに社説をさす。記事と関連については、「政治漫画」が素材とした記事の情報量をコラムセンチ法を用いて測定し、掲載新聞の中でどのくらいの位置を占めているかを考察する。この記事と、「政治漫画」の創案に寄与したと推測される社説の双方について、それぞれ「政治漫画」との関連を記事（ないし社説）に対して「政治漫画」が好意的か非好意的か、あるいは関連がないかを評定者を決めて評定させた。なお、評定しにくいものは筆者が評定を下した。

## 2 内容分析——分析結果と考察

### 1) マクロ的分析

この分析で使用した「政治漫画」の総数は五四四枚、九〇年八月から九二年六月まで五紙に掲載された「政治漫画」は三〇二六枚であるから、PKO関連の「政治漫画」は約一八パーセント、五枚に一枚弱は平均して掲載されている

ことになる。(表2)からもわかるように、「読売」と「毎日」の枚数の差が目立つ。しかしながら、掲載枚数の比率をとると、「読売」一九・二パーセント、「毎日」二三・二パーセントとそれほどの違いはない。どの新聞においても扱いはほぼ一定であるといえる。

(表2)において月別の掲載枚数が最も多かったのは九〇年一〇月の六四枚、次いで九二年六月の五四枚である。後者は、法案成立の六月一五日前後では出尽くしているの、実質的な掲載数からいえば最も多い月に属する。また、前者は、国連平和協力法案が国会に提出された月であり、カネ・モノ以外の貢献策が具体的に示され嫌応なしに国際貢献という問題が目の前に初めて、(解決の意思、決定を早急に求められることは異なり)呈示された点で特徴的である。そのため「政治漫画」の題材として多く採り上げざるを得なかったと考えられる。九〇年八月のイラクによる「湾岸危機」の発生は、自衛隊派遣までは政府自民党内でも主流となっていない。<sup>(12)</sup>「国際貢献」に代表される「凝集シンボル」<sup>(13)</sup>の域を超えてはいない。それに対して九〇年一〇月の法案提出は、概念の具体化という点で大きな意味をもつのである。この概念の具体化という点に用いると、国連平和協力法案の国会提出時に比べてPKO法案の提出時の方が「政治漫画」として描かれる枚数が少ない(九一年八月、一四枚、九月、一三枚)ことが説明できる。「国際貢献」シンボルの具体化として途中に湾岸戦争という外圧があったがゆえに、新たな法案としての認知がされなかったといえる。つまり、PKO法案は国連平和協力法案の修正版にすぎず、PKO法案自体のもつ特色は全体としては把握が難しいものとなった。そのために、新聞メディアを通してPKO法案イメージは実体が伴わず、参照する対象の領域が広範にわたるシンボルとなった。「PKO協力の不幸な出発」<sup>(14)</sup>、「PKO」成立の画期的な意義<sup>(15)</sup>などと評価が分かれたのもまさにシンボルの曖昧さをPKO法の認知が作り出したのである。

## 2) ミクロ的分析

PKOがどのようなシンボルによって表現されているかを各紙別に見たのが(表4)である。これによれば、「迷彩

服」や「ヘルメット」が各紙とも上位を占めている。PKOをイメージさせるものとして、自衛隊の海外派遣が描き手の頭にあることがわかる。次いで「飛行機」、「船」、「戦車」などが続く。「迷彩服」や「ヘルメット」は、身体を取り巻く事物によるシンボル化（個人（身体）シンボル）とみることができ、また、「飛行機」「船」「戦車」は、個人よりも組織に関与したシンボル化（組織化シンボル）とみることができ、前者の「シンボル」は、九〇年八月から九二年六月までほぼ一様に出現した。後者は、九一年上半期に出現度数が集中した。このことから、「個人シンボル」にはある種の恒常的な属性が、「組織化シンボル」には時期的、突発的な問題に伴う属性がそれぞれ存在すると思われる。

この定期性——時事性の属性を例証するために、前節で設定した時代区分に沿って各シンボルの出現頻度をまとめたのが（表5—1）（表5—2）である。

（表5—1）をみると、「戦車」「飛行機」「船」「機（地）雷」というシンボルは②期「一二〇国会」時に集中している。この国会は、湾岸戦争を背景とした国会であり、「国際貢献」の具体策が求められていた国会であった。①期で廃案になった「平和協力法案」で「開墾」された「土地」が、湾岸戦争で再び手が入られ、PKO法案という「作物」を栽培し収穫するまでの過程の時期であった。

九一年一月一七日の湾岸戦争勃発に対しての何らかの具体策を余儀なくさせられた政府は、同日、難民輸送に自衛隊機を派遣することを決定した。一月二五日には、閣議決定により暫定措置として自衛隊機の中東派遣を認める特例政令を出した。しかし、憲法をめぐる野党との対立、民間機による難民救援（二月二五日）、「国際機関から」の「要請」がないままに湾岸戦争が終結（二月二八日）したために一度も政令は実施されず、四月一九日に廃止された。この経緯を背景にして九一年一月から二月は、「飛行機」によるシンボル化が多い。

湾岸戦争後の処理をめぐる掃海艇派遣が政治争点として浮上する。<sup>16</sup>三月一三日、政府・自民党内で生じた掃海艇

派遣案は当日、野党を含めた政調・政審会長会談で話題に上った。翌一四日に早くも公明党が反対の意志表明をし、海部首相も派遣には慎重な姿勢を崩さなかった。ところが、外務省や経団連による派遣促進の動きと、政府独自の世論調査(賛成六二パーセント)結果、及び四月一五日の石狩湾での海上自衛隊の派遣訓練の報道などにより、「湾岸戦争終結後」という安心感から派遣肯定の雰囲気と野党間、マスメディア内で生じつつあった。その結果、四月一五日の党首会談を経て、二九日に閣議決定となった。この流れに乗って「政治漫画」にも「掃海艇」をシンボルとするものが三、四月には多く掲載された。

これに対して、「個人(身体)シンボル」の場合には、⑤期(九二年一月～六月)に若干の増加はあるものの、ほぼ一様にどの時期にも出現しているのが(表5-12)からわかる。なぜこのような「個人(身体)シンボル」にPKO概念を具現化させたかを考える際に、メドハストらが提起した「(政治漫画の)主題設定の技法」をもとにして説明する。

「政治漫画」の主題をどのようにして決めるかという点についてメドハストらは「政治常識」、「文学・文化による示唆」、「人物の特徴」、「時事的な話題」の四つの類型に分けて説明をしている。<sup>(18)</sup>これらの類型に共通するのは、読み手にどのようなステレオタイプを形成させる(既存のステレオタイプを喚起させる)かを念頭に置いている点である。ステレオタイプの動機づけに具象化や擬人化とがあげられるのは「個人による経験には限界がある」<sup>(19)</sup>ためであると考えられる。とすれば、「個人(身体)的シンボル」によって反復を繰り返すことによりステレオタイプを受け手が形成し、それを喚起することに大いに関与するといえる。つまり、身近さからみて「服装」は「戦車」「飛行機」に比べて親近性が高いのは明らかである。そのため、「個人的なシンボル」がどの時期にも一様に登場するのである。

各紙別にシンボル化される事物の出現にはどのような傾向が見い出されるであろうか。(表5-1)より「朝日」のみ「金銭」が一番多く出現しているのが目立つ。また、「朝日」では、「迷彩服」や「ヘルメット」の「個人(身体)的シンボル」よりも「組織的シンボル」の一つである「船」の頻度のほうが大きい。シンボル化される事物の種類をみ

ると、「朝日」は八六項目あり群を抜いている。さらに「政治漫画」一枚当たりのシンボルの出現数をみると、「朝日」一・三四、「読売」〇・六九、「毎日」〇・八五、「北國」一・〇五、「北陸中日」〇・九、であった。これらのことから「朝日」の使われるシンボルとしての事物の拡散状況が目立っていることがわかる。

このような「朝日」におけるシンボルの拡散は何を意味しているのだろうか。「朝日」がシンボル化している事物はメドハストのいう「文化による示唆」が多い。他の四紙では、「時事的主題」や「政治（軍事）常識」に訴える事物（例えば、「北國」の「赤紙」、<sup>(21)</sup>「読売」の「戦艦」<sup>(22)</sup>に向かって敬礼<sup>(22)</sup>）が多いのに対して、「朝日」は軍事的シンボルを既に「風化」してなじみのないものとみなしている傾向がある。ステレオタイプとの関連で言えば、未知なる事項であるPKOという認識が受け手の「庶民」意識であり、軍事は平和を希求する日本国民にはなじまないとする「朝日」の枠組があり、それに基づいてPKOを「庶民」の既存のステレオタイプに何とか関わらせようとする試みが「シンボル」の拡散につながったのであろうと考えられる。

PKOや国際貢献を表す「政治漫画」によく用いられた言葉は何かをみると、（表6）のようになった。「PKO」が頻度としてどの新聞も高いのは明らかだが、登場した時期は各紙により少し違いがある。<sup>(23)</sup>③期「一二国会」以前に「政治漫画」で用いられた言葉では、「国際貢献」、「平和協力法案」、「掃海艇」、「憲法」<sup>(24)(25)</sup>などが多い。一般に、漫画における言葉の役割は絵の内容を補完するものとして他の符号や記号と同列に扱われている。したがって、図や絵画表現のシンボル分析と同様に、PKOをシンボル化する言葉を（表6）からグループ分けすると、（a）「恒常性のあるシンボル」と（b）「一過性（時事性）のシンボル」の二つに分けることができる。（a）には、「PKO」、「国際貢献」、「憲法」が、（b）には、「平和協力法案」、「掃海艇」という言葉がそれぞれ対応する。

右に述べた分類をもとに「中央紙」（「朝日」「読売」「毎日」と「地方紙」（「北國」「北陸中日」）<sup>(26)</sup>を比較する。「中央紙」では、「貢献」——「平和協力法」——「PKO」というふうに頻度の高い言葉が時系列に推移する。これに対して「地

方紙」では、「平和協力法案——「掃海艇」——「PKO」と最頻度の言葉が推移していく。「PKO」が「政治漫画」に登場する時期をみると、「北陸中日」は九一年五月、「北國」は同年八月、と「中央紙」に比べて時期的に差がある。これは、「中央紙」によって設定された「議題」(agenda)を受けて紙面に掲載する傾向が「地方紙」の「政治漫画」に關してはみられるためと考えられる。地元に関する情報と中央に関する情報との双方の均衡を保つところに自らのアイデンティティの一部を求める「地方紙」にとって、中央の情報をできる限り地元の情報と関わらせて取り込もうとする姿勢がある。<sup>(28)</sup> それゆえ、全国的な情報でもかなり「顕在化した」——読者の知覚に何度か訴えかけた後で——状態でない「政治漫画」としては表出されてこない。<sup>(29)</sup>

PKOをシンボル化する人物はどのような人物であろうか。(表7-1)のように登場する人物の数を見ると、いずれの新聞も一人ないし二人の人物を「政治漫画」の半数以上に登場させている(五三・五パーセント)ことがわかる。これは「政治漫画」に表われる「見かけの情報量」<sup>(30)</sup>の少なさに起因する性質である。限られた紙面、限られた時間(送り手だけでなく受け手の読者も)、限られた素材、<sup>(31)</sup>という状況面の制約と、「実際の情報量(潜在的信息量)」を最大限に引き出す技法——簡潔さの中に象徴性を読み取らせる——とが相俟って人物の簡略化がなされたのである。

次に特定化される人物は具体的にどのような属性をもっているのだろうか。(表7-2)のように五つのカテゴリーに分けて各紙ごとに作成したクロス表から次のことがいえる。首相(海部・宮沢)<sup>(32)</sup>が全体として四〇・六パーセントを占め、次いで野党政治家が三三・一パーセントと、この二項目だけで七〇パーセント以上が首相と野党政治家で「政治漫画」が構成されていることがわかる。<sup>(33)</sup> (表7-1)の結果(二枚の「政治漫画」には一、二人の人物が登場することが多い)と合わせて考えると、賛成対反対の対立・対比を基本図式とする「政治漫画」が多いことが読み取れる。さらにいえば、多数派(majority)と少数派(minority)の対比が基底としてあり、その上に政府―野党、自公民―社(共)の対立を表わしている「政治漫画」が多い。また、首相の登場数が多いのは政治家として最も認知しやすい存在であると

考えられていることによって。この意味で「政治漫画」にみる首相像はクラブ（Orrin E. Klapp）のいう「象徴的リーダー」（symbolic leaders）<sup>(34)</sup>を描いている。自分でフォロアーを調達し組織を動かす「組織的リーダー」（organized leaders）は政治の表舞台には仲々現れない。自分の意思とは無関係に政治の表舞台に担がれる存在である「象徴的リーダー」が「政治漫画」の対象とならざるを得ない状況が日本の政治の実情を反映しているのは皮肉なことである。<sup>(35)</sup>

野党政治家の方に目を転じると、その中では九割が野党の党首であり、しかも社会・公明・民社に集中している。共産が扱われていない新聞もあり、政府・自民対野党という図式でも、野党が一枚岩として描かれてはいないことを端的に示している。ここにおいて、社会・民社の各党首の登場頻度はほぼ一定である。消費税法案過程の「政治漫画」に比べて自民・社会の対決図式になりにくい。むしろ、社公民三党まよめの登場機会が多い。しかしながら、この三党間の関係を均等あるいは一括して描いている訳ではない。社会（土井・田辺）―公明（石田）民社（大内）の対比を描く「政治漫画」が多く、公明・民社を自民が取り込んでいった様子が覗える。たとえば、「毎日」では九〇年一〇月に平和協力隊が憲法に抵触するか否かをめぐって、民社は「抵触せず」、公明は「態度保留」、社会・共産は「抵触する」という立場をそれぞれ表わした「政治漫画」（90・10・7 M）を掲載した。これを皮切りに、同年一月には政府・自民党寄り（構図上も）に公明・民社が描かれ（90・11・28 M）、九一年八月にはPKO法案国会提出の際の公明の立場の揺れを描き（91・8・4 M）、同年一月以降公明・民社が登場した「政治漫画」九枚はすべて公・民は政府サイドの位置（態度表明）を基準として描かれている。このような流れをみると、政府・自民党からみた野党対策として、社―公・民の分断と結果としての社会の孤立化、公・民の懐柔、とくに公明の囲い込みがPKO法案成立のための鍵であったことが「政治漫画」の人物描写を中心にした観察から推し量ることができる。また、九〇年一〇月の「国連平和協力法案」の廃案直後に示された自民・民社・公明のPKO参加合意がPKO法案成立に大きな意味をもってくることも「政治漫画」が示しているのである。

## 3) 活字情報との関連

本稿で述べる「政治漫画」の活字情報を、記事と社説に限定したのは、「政治漫画」を新聞漫画として位置づけたことと共に、「政治漫画」の枠外の活字による情報との関連を探ることの二つの目的からである。<sup>(38)</sup>

(図1) からわかるように、「政治漫画」が扱う話題に対応した記事量(コラムセンチで表示)は、「政治漫画」の出現枚数(表2)とほぼ比例している。具体的には、九〇年一〇月から一一月までの間の平和協力法案の提出と国会での不成立の時期、九二年四月から六月までの間のPKO法案審議、可決成立の時期、この二つの時期の記事量が多いが目立つ。次いで九一年一一月の記事量が多い。この月に宮沢内閣が成立し、PKO法案が衆院特別委員会で強行採決となった。これら一連の出来事を、「政治の舞台」における「主役」の交替と「儀式」としての強行採決とみなすならば、マス・メディア自体にとっても「政治漫画」にとっても格好の材料になった。マス・メディア(特に新聞)にとっては、首相交替―強行採決という「政治的出来事の儀礼化」の一担を担う役割(場面設定をする)を得る好機であった。他方、「政治漫画」にとっても、人物のもつ作品構成上の影響力、並びに、儀礼の要素であるステレオタイプが他の時期の出来事に比べて「政治漫画」として成立させやすい要因となったと考えられる。

(図2) (図3) から新聞間の差違を具体的な記事内容・見出しをふまえて考察すると、「朝日」と「読売」との間に著しい特徴がみられる。九〇年八月のイラクのクウェート侵攻時に「読売」は「朝日」の二・五倍の記事量を「政治漫画」に関連したものだけでも掲載している。「朝日」三六三コラムセンチ、「読売」一〇〇一コラムセンチ。「読売」は掃海艇派遣を唱えた渡辺美智雄氏の発言を受けて翌日(二八日)にすぐに「政治漫画」としてこの模様を描いている。国際貢献の具体策の提示が「朝日」に比べて迅速である。シンボルの分析のところで指摘したように、国際貢献は急務であるという認識に基づき「貢献策」を議題として設定したと考えられる。この「読売」の争点顕出性の素早さは、九〇年一〇月から一一月の平和協力量案の廃案、九一年四月の掃海艇派遣の決定、九二年四月から六月までのPKO

法案可決成立までの過程、のいずれの場合においても「朝日」やその他三紙に比べて相対的に「政治漫画」に関する記事量が減少傾向にあることから示すことができる。争点をいかに早く顕在化させるかに腐心し、その解決には重きを置かない——一応の解決の提示をした後には——姿勢が「政治漫画」とその付随する記事の量から読み取れる。

平和協力法案の廃案については、実際に廃案になった九〇年十一月の記事量をみると、今度は「朝日」が「読売」の二・二倍の記事量を「政治漫画」にあてている。（「朝日」一二八コラムセンチ、「読売」五四五コラムセンチ）「読売」は十一月において、平和協力法案よりも自公民三党の新法案作成のための合意について多くの記事を割いている。たとえば、九〇年十一月五日の参院愛知補選における勝利を描いた直後の八日に「新法」の模索をする姿が描かれている（90・11・8M）。これに対し「朝日」では一〇日の廃案決定までの過程を詳細に記事と「政治漫画」で表わしており、「新法」については関連する記事は見当らない。

なお、「全国紙」と「地方紙」との間には、「政治漫画」が依拠する記事の量について特に目立った差違を発見することはできなかった。

（表8）は「政治漫画」が扱う主題、関連する記事とのつながり、社説とのつながり、の三項目における好意・非好意・関連なしの三段階に分けた評定をした結果である。

記事との関連をみると、素材とした記事に好意的、非好意的な評価を得た「政治漫画」がともに四〇パーセント近く存在した。また、社説との関連では、中立的態度が四〇パーセントを超えた。

これらのことから、PKOに関する「政治漫画」は、関連する記事に対しては一定の立場を固定的にとり続けるというよりはむしろ場面や内容の微妙な差違に対応する「状況的」であると考えられる。記事自体が「客観報道」を意識する余りに「政治漫画」に対しても自制を要求する作用が働いたものと思われる。

社説との関連についていえば、「政治漫画」は中立的態度に終始したともいえるが、好意的な姿勢も三割を超してい

る。それゆえ、消極的ながら社説の意向に「政治漫画」は迎合しているといえよう。

「状況的」であることは次の点からも推察できる。当該テーマについて「政治漫画」がどのような立場をとっているかを評定した結果、テーマに非好意的な態度をとるものが約八〇パーセントにものぼった。当該テーマがPKOそのものだけでなく、PKOに付随する概念・事物あるいは行為（平和協力法案、自衛隊機派遣、野党の牛歩戦術など）を含んでいるために、PKOに反対していると速断はできない。しかしながら、前述の素材となる記事や社説との関係とを合わせてみれば、記事それ自体が何らかの立場を含みもつ。

また、この「政治漫画」のPKO法案に関連する一連の事象に対する立場が「記事」や「社説」との相互作用のなかで薄められていったことがわかる。言い換えるならば、記事や社説と「政治漫画」との関係はあくまで主（記事・社説）―従（「政治漫画」）であり、それゆえ「状況的」な対応を余儀なくされるのである。

### 第三章 結論と展望

以上、一九九〇年八月から一九九二年六月までの二三ヶ月間の新聞の「政治漫画」の分析を通してPKO法案の成立過程を概観し、併せて新聞における「政治漫画」の特徴を抽出した。

二三ヶ月の期間全体の「政治漫画」の出現枚数の分布からPKO法案成立までに六つの区分が可能になることが裏付けられた。その中でも平和協力法案の国会提出時の枚数が多かったことから、PKO法案に関しての事前状況の成立と認識枠組の形成が図られたことを指摘した。

シンボルの分析については、シンボル化する対象に応じて、①事物、②言葉、③人物、の三つのカテゴリーを設定して分析した。①と②については、自衛隊機派遣問題、掃海艇派遣問題を扱った「政治漫画」の頻度が高く、また、具体的な事物や言葉から共通点を見い出すと、恒常的な性格をもつ「個人シンボル」、登場する時期が限定されている

「組織シンボル」の二つに分類することができた。この①と②のレベルでは、事物と言葉がともに二つのシンボルに分けられただけでなく、事物が画像として構成した「政治漫画」の「構造」を補足する役割をも見ることができた。

③のシンボル化される人物では、一枚の「政治漫画」に登場するのは一人ないし二人であり、表現上の「簡潔さ」を特徴づけた。具体的な人物では、海部・宮沢両首相と野党党首、政府首脳と政治家だけで九割以上を占めた。特徴的なことは、野党と政府（首相）の対立図式に加えて野党間の相互関係——公明・民社の自民への接近と事実上の「連合」化、社会・共産の分断と政策決定上の孤立化——を「対比・対照」の技法を軸にして描かれていたことであった。

「政治漫画」外の活字情報（記事・社説）と「政治漫画」との関連をみると、扱う主題そのものに對しての「政治漫画」の傾向は、明らかに非好意的なものであった。しかし、「政治漫画」制作に寄与した記事および社説との関係は、好意・非好意・中立のいずれにおいてもほぼ均等な割合の評定結果が出た。また、新聞各紙間の差はこの項目に関しては目立った差違は見られなかった。

全体として「政治漫画」のPKO報道に対する役割は、記事や論説を補完するだけではなく、PKOに関する諸問題を争点として顕出させる働きをもっていた。この点には、「中央紙」では「朝日」と「読売」との間に、また、「中央紙」「三紙」と「地方紙」二紙との間に、それぞれ差違が認められた。

次に、「政治漫画」研究に関する今後の課題を二、三述べておきたい。

まず第一に、「政治漫画」の枠内（「コマ」の中）の分析を進める必要がある。シンボル間の相互作用をどう分析するかという問題がある。本稿も含めて「政治漫画」の「主体」／「客体」（「主部」といってもよい）の検討は幾分されているが、「主体」と「客体」とをつなぐ部分（「述部」ともいえる）の検討がまだなされていない。修辭的アプローチ（メドハストなど）の数量的分析が求められる。

第二には、「見出し」や「吹き出し」に用いられている文字と画像との関係である。それ以外にも絵の中で説明とし

て用いられている文字と絵そのものとの関係を見る必要がある。

第三には、送り手の構造を作品である「政治漫画」からいかに読み取るかという問題がある。記事や論説(社説・コラム)、あるいは投書(受け手の対応)<sup>①</sup>と「政治漫画」との関連を、同一紙面内での比較、同一主題での比較という作業をより丹念に行うことによって読み取る必要がある。「地方紙」の通信社からの、「ブロック紙」の中心紙からの「配信された」(syndicated)「政治漫画」「記事」「投書」のもつ意味への考察も送り手の構造を理解する際の手掛りとなるだろう。

新聞漫画の歴史をみればわかるように、本来新聞漫画は「解説」(政治現象の)として字の読めない人々にとっても政治のできごとを知らせるはたらきをしていた。日本の例をいえば瓦版の時代、「大新聞」の時代がこれにあたる。これに対して新聞漫画を「政治(学)の漫画」としてとらえる動きは、メッセージの訴求力を内包していたとはいえ、新聞メディアが「意見メディア」として政府・体制批判を始めた時代の新聞と呼応する。

前者の機能を「解説」、後者を「論評」とすれば、「解説」はマス・メディアの大衆化、知識を一般の人々に伝播させ、人々を啓蒙する作用をもち、「論評」は専門化、分化の側面を広げる結果を生み出すとみなすことができる。「政治漫画」のもつ「わかりやすさ」と「言外の意味」の二重性を敢えて分離させたといってもよいだろう。「論評」の機能が読者に判断を任せるといった擬似的な「客観性」を保とうとする限り、「政治漫画」のもつ二つの機能の統合から生まれる「政治学をもつ漫画」の可能性はますます遠のく、といわざるを得ない。この深く狭いところに陥った「論評」の機能を奥底から引出すことが「政治漫画」の活性化には求められているのである。

## 第一章

- (1) 岩井奉信『立法過程』(現代政治学叢書12 東京大学出版会) 一九八八年。なお、いわゆるメディア・フレーム (media frame) にあつては Todd Gitlin, *The Whole World Is Watching: mass media in the making & unmaking of the new left*, (University of California Press / Berkeley, Los Angeles, London, 1981) 鶴木真「新聞の枠組設定機能に関する一考察——戦後転換期と朝日新聞社説——」(慶応義塾大学「法学研究」第六十一巻第一号 一九八八年一月所収九七一—一四頁)。等を参考のこと。
- (2) M. E. McCombs, & D. L. Shaw, "The agenda-setting function of mass media," *Public Opinion Quarterly*, vol.36, 176-187. D. マクウェール (竹内郁郎／三上俊治／竹下俊郎／水野博介訳『マス・コミュニケーションの理論』(新曜社) 一九八五年。などを参照。
- (3) 新聞に定期的に掲載される「コマ漫画」を本稿では「政治漫画」とする。
- (4) Henry Ladd Smith, "The Rise and Fall of the Political Cartoon," *The Saturday Review*, 29. May 1954, 7-9, 28-29.
- (5) 漫画雑誌「イラスト」に比べて、日々の締切、コマ当りの収益が低いことが「政治漫画」を専門として描く漫画家の少なさの原因となっている。第三章参照。
- (6) 人文科学では、特に心理学で発達、認知の分野の道具として用いられることが多い。評論風の漫画論、作家論は存在するが印象論の域を出ない。なお、アメリカの「政治漫画」の研究動向については、拙稿「政治漫画の機能——研究動向を主として——」(関東社会学会「年報社会学論集」創刊号 一九八八年所収) 七九—九〇頁、を参照のこと。
- (7) 藤沢英昭他『ビジュアルコミュニケーション』(タヴィッド社) 一九七五年。
- (8) E. H. Gombrich, "Visual Metaphors of Value in Art," in *Symbols and Values: An Initial Study*, ed. L. Bryson (New York : 13th Symposium of the Conference on Science, Philosophy and Religion in their Relation to the Democratic way of Life, Inc, 1954) p.p.255-282. (一見史朗訳「芸術上の価値の視覚的隠喩」一見史朗・谷川渥・横山勝彦訳「樺馬考 イメージの読解」勁草書房一九八八年、所収) 持田季未子、「絵画の思考」(岩波書店) 一九九二年。
- (9) Lawrence H. Streicher, "On a theory of political Caricature," *Comparative Studies in Society and History*, 9 (1966-67), 427-445.
- (10) 副田義也『マンガ文化』(紀伊国屋書店) 一九八三年。
- (11) 日本の漫画史については、呉智英『増補版現代マンガの全体像』(史輝出版) 一九九〇年、清水勲『漫画の歴史』(岩波書店) 一九

九一年。を参照のこと。

(12) 岩井、前掲書、一四三頁。

(13) Murray Edelman, *The Symbolic Uses of Politics*, (University of Illinois Press, 1967, 1985 with a new afterword)

(14) 日常生活に「政治」を発見する姿勢からも「みる政治」と「する政治」の連続性を知る手掛りが得られる。

## 第二章

(1) 国会と国会との間が一カ月以上ある場合には、その中間期を前の国会のカテゴリーに入れて政治漫画を扱った。

(2) 九〇年八月より九二年六月までの朝日・毎日・読売・北國・北陸中日五紙のPKO関連の「政治漫画」は月平均二三・六枚である。これに対して、一一九国会時の九〇年一〇―十一月は、五一枚、一二三国会(九一年一月―十二月)では二八枚も月平均で表われている。第二節参照。

(3) マス・メディアの世論形成については、竹下俊郎「マスメディアと世論」(『レビューアサン』一九九〇年秋季号、通巻第七号、一九九〇年所収)七五―九六頁、を参照。

(4) 時期区分は以下の通り。

① 「一一九国会」一九九〇年一〇月―二月

② 「一二〇国会」一九九〇年二月―一九九一年七月

③ 「一二二国会」一九九一年八月―一〇月

④ 「一二三国会」一九九一年一月―十二月

⑤ 「一二三国会」一九九二年一月―六月

(5) 飯坂良明「連合政権と政党」(ジュリスト増刊35『日本の政党』有斐閣一九八四年所収)二四二頁。

(6) 九〇年七月より十二月までの五紙の石川県における発行部数は次の通り。(日本ABC協会の資料による)

「北國」(朝夕) 三六六二四六 (七八・七六パーセント)

「読売」(朝夕) 四二二八五 (九・〇七パーセント)

「朝日」(朝のみ) 一五四八二 (三・三三パーセント)

「毎日」(朝のみ) 四七三二 (一・〇二パーセント)

\*「北陸中日」は資料入手不可

石川県この期の発行部数は約四六五〇〇部である。

(7) ちなみに、各紙の「政治漫画」の掲載日は、「朝日」は日曜から土曜日までの朝刊に、「毎日」は木（金）曜日と日曜日、「北國」は日曜から土曜までの朝刊、「北陸中日」は不定期であった。なお、「読売」は九一年八月まで、朝・夕刊各曜日に掲載（月曜の朝刊はなし）されていたが、執筆者の若干の変更と共に九一年九月から、夕刊は土曜のみ（馬場のはる「土曜漫評」となった。

(8) ここでいう人物とは、海部首相（当時）、土井社会党委員長（当時）などのように人名が容易に想起できる人間をさす。なお、以下の各人物の肩書は掲載された当時のものである。

(9) L・ホグベン（南博他訳）『コミュニケーションの歴史』（岩波書店 一九五八年）を参照。

(10) 「政治漫画」内の活字情報（「吹き出し」「キャプション」＝見出し、など）の分析については今後の課題としたい。「吹き出し」に関する興味深い考察をしているものに、——「政治漫画」だけではないが——四方田大彦「コミックスの偶景10・11」（「ちくま」一九九二年一〇・一一月号）がある。

(11) むろん、一枚の「政治漫画」に一つの記事・社説が対応するとは限らない。対応する記事・社説がない場合もあるし、また、多くの記事・社説に対応するものもある。そこで、原則として、「政治漫画」に対応する記事・社説は、「政治漫画」が掲載された日付から一週間以内の記事・社説とした。

(12) 九〇年八月一八日の段階で首相周辺では「掃海艇派遣は世論を考えると難しい」との認識を示したとされている。（「毎日」八月一九日朝刊）

(13) 「擬集シンボル」の考え方については次の文献を参照。E. Sapir, 'Symbolism' In E. R. A. Seligman (Ed.) *Encyclopedia of the Social Sciences* (Vol.14) Macmillan, 1934. p.p.492-495.

(14) 『朝日』社説、一九九二年六月一六日朝刊。

(15) 『読売』社説、一九九二年六月一六日朝刊。

(16) 「自衛隊機派遣」と「掃海艇派遣」の決定過程には、根回しのための状況作りが時間がある程度必要であることがわかる。前者は「突発的事態」への対応として当初から「派遣ありき」の肯定論が続出した。それゆえ、野党を含むメディア、世論の反発を招き実現不可能となった。これに対して、「掃海艇派遣」の場合には、政府・自民党側の「不協和音」をあらかじめ提示してメディアに

報道させ、世論調査結果を錦の御旗として「世論」を肯定させ、「戦後処理」(戦争中に派遣するよりはるかに身の危険は少ないという含み)シンボルを掲げて派遣の正当化に努めた。野党との調整にも、メディアの枠組を徐々にずらしていくことは結果として与党側に有利に働いた。

(17) 新聞社が行った「自衛隊機派遣」、「掃海船派遣」についての世論調査は次の通り。

〔自衛隊機派遣〕①朝日(九一年二月五日朝刊掲載—以下同じ)、「賛成」三三・五パーセント、「反対」五六パーセント、②毎日(九一年一月九日朝刊)「賛成」三四パーセント、「反対」五一パーセント、③読売(九一年三月一日朝刊)「当然」二二パーセント、「やむをえない」三九パーセント、「すべきでない」四五パーセント、④日本世論調査会(北國・九一年一月三〇日朝刊)「のぞましい国際貢献策」・一層の経済支援三六・四パーセント、経済支援プラス自衛隊以外の人員派遣三三・七パーセント、自衛隊派遣一六・四パーセント

〔掃海艇派遣〕①朝日(九一年四月二四日朝刊)「賛成」五六パーセント、「反対」三〇パーセント②読売(九一年四月二六日朝刊)「当然」二八パーセント「やむをえない」四七・四パーセント、「すべきでない」一八パーセント。

(18) Martin J. Medhurst & Michael A. Desousa, "Political Cartoons as Rhetorical Form: a Taxonomy of Graphic Discourse," *Communication Monographs*, 48, September (1981), 197-236.

(19) W・シュラム編(学習院大学社会学研究室訳)『新版マス・コミュニケーション・マス・メディアの総合的研究』(東京創元社)一九六六年 一八八—一九〇頁。

(20) 清水幾太郎、「ジャーナリズム」(岩波新書) 一九四九年。

(21) 「北國」(92・6・17 M) 以下「政治漫画」を個別に表記するには、「新聞名」(年・月・日 M(朝刊) E(夕刊))のように行なう。

(22) 「読売」(91・3・15 M) なお傍点は筆者。

(23) 最も早い時期に「P KO」という言葉を「政治漫画」に登場させたのは、「毎日」(90・11・18 M)である。ただし、このときには、平和維持活動の概念の提示として用いられており、(自衛隊の)海外派遣の文脈ではない。

(24) Medhurst & Desousa, op. cit., また「次の文献も参照のこと」Randall P. Harrison, *The Cartoon: Communication to the Quick*, (Sage Publications, Beverly Hills) 1981.

- (25) 「政治漫画」の絵と言葉との機能分担の例として「毎日」(90・11・18M)をあげて説明する。海部、石田、大内(敬称略―以下同じ)のスクラムと石田を引きとめようとする土井との対比を自公民と社会の対立の表象として絵により表わす反面、国連平和維持活動を言葉によって表わしている。つまり、「何が」「何を」「どうする」という情報の主体・客体とその相互作用を絵によって表現し、「何について」という情報の方向を言葉によって表現している。また、海部ら三人が着ているTシャツのロゴに「PKO」、「IKO」と三人の頭文字を修正して)と記しているのも、言葉のゴロ合わせやモジリの作用を狙ったものである。なお、次の文献も参照のこと。
- Maxwell McCombs, E. Emsiedel, D. Weaver, *Contemporary Public Opinion: issues and the News*, (Lawrence Erlbaum, 1991) chap. 2
- (26) 「北陸中日」は本来、「ブロック紙」ではあるが便宜上、ここでは「中央紙」に対するものとしての「地方紙」(北陸三県に本社がある)の分類に入れた。
- (27) 「地方紙」が通信社を情報源としてかなりの程度依存していることは指摘されている。また、「地方紙」同士が「政治漫画」や「コマ漫画」を八時間差使用している例もある(ことに「コマ漫画」はそうである)。しかしながら、「地方紙」独自の情報源でないとはいえず、どの「政治漫画」を掲載するかは各「地方紙」の裁量であり、その結果が紙面に反映されている。「中央紙」においても「政治漫画」という情報の送り手は誰であるかは一概には断定しにくい。漫画家、新聞社の相互作用の結果生ずるものとしかれない。とすれば、「地方紙」の「政治漫画」の情報としての価値は、減じられることはない。(たとえば「北陸中日」と「東京新聞」を比較してみると、「東京新聞」の「政治漫画」が全て「北陸中日」に掲載される訳ではない。)
- (28) たとえば、「北國」では、国際貢献税に相当するものとして酒・たばこの税率上昇をテーマにした「政治漫画」を他紙よりも早く、かつ多く掲載している。
- (29) 一般の記事とはこの点が「政治漫画」の異なる点である。報道・評論・文化の側面をもつ点の反映でもある。また、それゆえの問題も生ずる。
- (30) 拙稿、「政治漫画にみる選挙―第39回衆議院選挙―」(『年報社会学論集』第三号、一九九〇年所収)参照。
- (31) 読み手が実際に何を求めているか、あるいは読み手と想定した存在が何を求めているかがまず送り手の自己規制を生む。
- (32) 因みに海部・宮沢両首相の首相としての登場数は、海部二五三回、宮沢一六九回とは海部首相からみて二対一の比率である。こ

れは、設定区間（九〇年八月から九二年六月）内の首相在職期間（海部一四ヶ月、宮沢八ヶ月）の比とは対応している。これより、首相は「政治漫画」に一定して偏りなく登場していることがわかる。

- (33) 与党政治家の登場数を入れる（一六・五パーセント）と約九割が彼らで構成されることになる。

- (34) Orrin E. Klapp, *Symbolic Leaders*, (Aldine Publishing) 1964.

- (35) この点こそ現代日本の「政治漫画」のもつジレンマを端的に表わしている。本来、「政治漫画」はトウイード組合のボスを嘆かせたり、ルイ王の顔をしかめさせたり、為政者、権力者の逆鱗に触れるような事実の暴露を宗としてきた。「組織的リーダー」を無理矢理表舞台に引張り出し、嘲笑の対象とした。それゆえ辛辣な風刺性を持ち、受け手の関心を得ていたのである。このためには、「組織的リーダー」の認知が容易な受け手を現代では捜す必要がある。ところが現代では、「組織的リーダー」は複雑な社会構造の中に埋没し、かつ、数千万人を講読層としてもつ日本の「三大紙」は、「知る人ぞ知る」類の人物を描く訳にはすんなりとはいかない。したがって当たり障りのない「象徴的リーダー」を描かざるを得ない。もともと「象徴的リーダー」といっても、その代表格たるべき人々を描くことはある種のタブーとなっているのが現実である。私見では、この種の人々を描いた「政治漫画」は皆無といつてよい。

- (36) 九二年六月の「北國」においては、野党政治家はのべ三一回登場するが、その内訳は社会（土井・田辺）、公明（石田）、民社（大内）の四人であり、共産、社民連などは登場していない。「牛歩戦術」は社会党のみが行なった訳ではないが、社会「牛歩」のイメージで描く傾向が見られる根拠がここにある。言い換えれば、「社共・中道」という「野党」シンボルの内容が「社公民」に転換し、それがファンタメンタル化しつつあることの反映ともいえる。

- (37) 社会党は土井・田辺両委員長の度数を加えた。

- (38) 四コマ漫画や連載漫画では、一コマとは異なり、他のコマとの相互作用も外部環境としてとらえる見方が一つの方法として成立する。「起」「承」「転」「結」の四つの構成要素によって漫画に動きを与えるのがその（コマ間の相互作用）の例である。「政治漫画」の場合には、コマ割りができないため、人物の動作や視線の方向によって動きを表現することが多い。(Medhurst & Desousa, op. cit.)

- (39) 「強行採決」を政治の手続の一つとみなす考え方については、坂本孝治郎「強行採決と議長裁定」（日本政治学会編『年報政治学一九八五―現代日本の政治手続き』岩波書店 一九八六年所収）を参照のこと。

### 第三章

（１）たとえば、「読売」九三年三月六日「読者相談から」の中で、竹下・小沢両氏の顔をつけた矢ガモの「政治漫画」は「毒が強すぎる」という指摘が投書にあった、と記している。

[illegible]

政治漫画にみる政治過程（茨木）

計	'92												'91												'90												年・月
	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8		
126	16	8	8	2	2	1	5	7	2	3	3	1	1	4	7	8	7	7	1	8	12	7	6														朝日
41	7	5	2	1	1	0	3	2	0	1	1	0	0	0	1	0	1	1	0	4	6	3	2													毎日	
187	11	12	9	4	5	1	6	10	3	3	5	0	6	9	9	7	8	13	0	14	24	8	20													読売	
90	11	7	5	1	1	3	7	5	0	2	3	0	2	3	3	3	7	3	1	7	10	4	2													北國	
100	9	10	12	2	2	1	5	6	1	4	2	0	0	7	4	2	1	6	0	5	12	4	5													北陸中日	
544	54	42	36	10	11	6	26	30	6	13	14	1	9	23	24	20	24	30	2	38	64	26	35													計	

（表2）PKO関連の「政治漫画」

（枚）

計	6	5	4	3	2	'92	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	'91	12	11	10	9	'90	8	
663	29	30	29	30	28	30	30	29	30	29	30	30	29	30	30	30	26	26	26	30	28	27	27	朝	日
177	13	9	9	9	8	8	9	8	8	5	4	4	5	8	8	8	8	6	7	9	8	8	8	毎	日
972	32	35	33	34	33	33	34	33	35	33	49	52	49	49	49	48	44	49	49	48	53	45	53	読	売
676	29	31	30	30	28	30	29	29	31	28	30	30	29	30	30	30	27	30	28	28	30	29	30	北	國
538	11	23	18	14	21	23	22	24	22	17	23	28	25	26	28	26	27	26	29	28	28	24	25	北	陸
3026	114	128	119	117	118	124	124	123	126	112	136	144	137	143	145	142	132	137	139	143	147	133	143	中	日
																								(	枚

(表3) 「政治漫画」掲載枚数

(枚)

（表4）シンボルとなる事物（上位5項目まで）

朝 日	毎 日	読 売	北 國	北 陸 中 日
金銭 兵士 船 迷彩服 ヘルメット 6 7 8 10 12	迷彩服 ヘルメット 5 6 相撲 兵士 4 4 自衛隊機 3	迷彩服 ヘルメット 12 28 飛行機 10 船 9 機雷 7	迷彩服 犬 ヘルメット 5 6 11 戦車 4 4	迷彩服 戦車 8 12 船 6 機雷 6 金銭 5
**総数 (カテゴリー数) 86 169	(17) 35	(47) 129	(56) 95	(50) 90

\*（他、地雷6、牛6）  
\*\*事物の総数、6位以下も含む。

(表 5-1) シンボルとなる事物 (時系列)

計	1'92 6	11'91 12	8'91 10	12'90 7'91	10'90 11	8'90 9		
6	2	0	0	3	0	1	戦車	朝 日
5	0	0	0	3	0	2	飛行機	
7	0	0	0	7	0	0	船	
5	0	0	0	4	1	0	機雷	
1	0	0	0	0	0	1	戦車	毎 日
3	2	0	0	0	1	0	飛行機	
1	0	0	0	1	0	0	船	
0	0	0	0	0	0	0	機雷	
2	0	0	0	0	0	2	戦車	読 売
10	1	0	0	7	0	2	飛行機	
8	0	0	0	8	0	0	船	
7	0	0	0	7	0	0	機雷	
4	0	0	0	3	1	0	戦車	北 國
1	0	0	0	0	1	0	飛行機	
4	1	0	0	3	0	0	船	
3	0	0	0	3	0	0	機雷	
8	3	1	2	0	1	1	戦車	北 陸 中 日
2	0	0	0	1	1	0	飛行機	
5	0	1	0	4	0	0	船	
13	2	0	0	1	0	0	機雷	

（表5-2）シンボルとなる事物（特定シンボル）

	1 '92 6	11 '91 12	8 '91 10	12 '90 7	10 '90 11 '91	8 '90 9		
7	2	1	1	0	2	1	迷彩服	朝 日
4	0	0	0	1	2	1	ヘルメット	
6	3	0	0	0	2	1	迷彩服	毎 日
5	0	1	1	0	2	1	ヘルメット	
28	7	5	5	3	7	1	迷彩服	読 売
12	0	2	1	4	4	1	ヘルメット	
11	6	1	2	2	0	0	迷彩服	北 國
5	2	0	1	1	0	1	ヘルメット	
12	9	1	1	1	0	0	迷彩服	北 陸 中 日
4	0	2	0	1	0	1	ヘルメット	

(表6) シンボルとなる言葉(上位5項目まで)

* 総数 129	憲法 (中東) 憲法 策 策	平和 協力 法 隊	国連 協力 隊	P K O	朝 日
	貢献 策	日本 憲法 案	協平 力法 案和	P K O	毎 日
	掃海 艇派 遣 (平和) 憲法	国際 貢献 策	平和 協力 法 案	P K O	読 売
	掃海 艇派 遣	憲法	協平 力法 案和	P K O	北 國
	掃海 艇派 遣	自衛 隊派 遣	協平 力法 案和	(平和) 憲法 P K O	北 陸 中 日
40	4	5	7	12	
174	8	9	10	18	51
64	4	6	7	8	21
65	2	3	7	9	35

\* 6位以下も含む。

計	0人	1人	2人	3人	4人	5人	6人以上	人物数
127	2	10	7	18	19	38	33	朝日
39	1	4	3	5	8	5	13	毎日
185	5	17	10	16	31	51	55	読売
91	0	9	4	9	16	26	27	北國
94	0	19	13	12	11	19	20	北陸中日
536	8	59	37	60	85	139	148	計

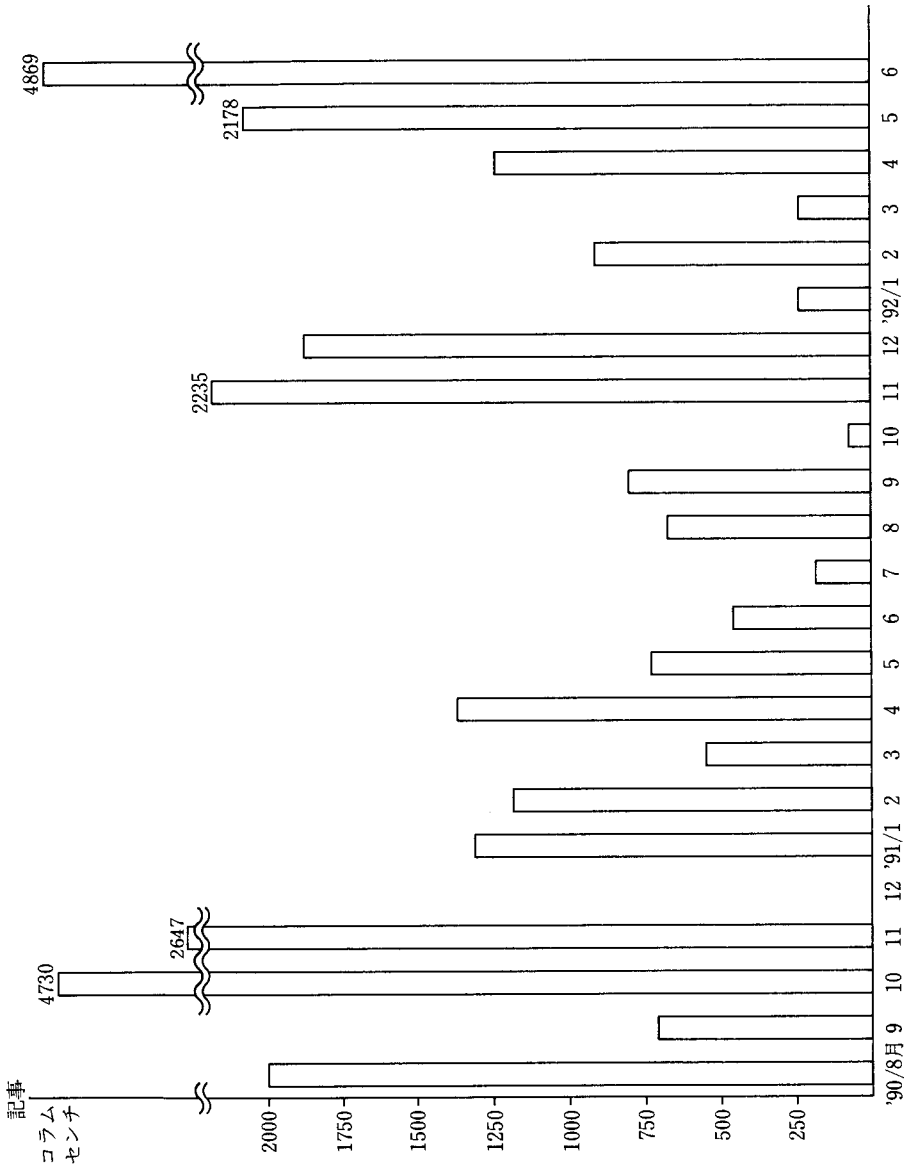
（表7-1）各紙別人物登場数

(表7-2) 特定化された人物数

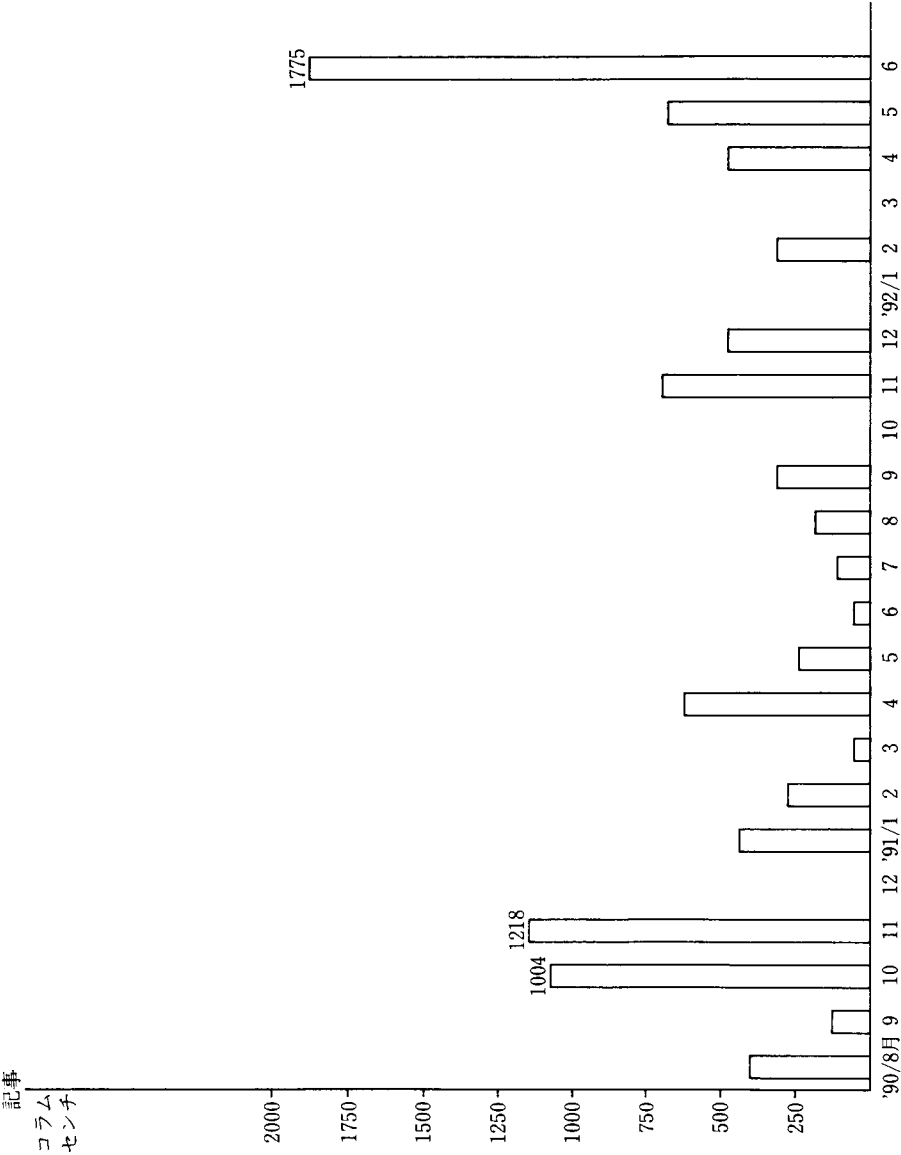
計	⑤ その他	④ 外国	③ 野党	② 与党	① 首相	
251	2	22	71	50	106	朝日
84	1	4	38	9	32	毎日
353	1	32	117	65	138	読売
117	1	10	31	14	61	北國
235	0	29	87	34	85	北陸中日
1040	5	97	344	172	422	計

（表8）政治漫画とテーマ・記事・社説との関連

	%	計	北 陸 中 日	北 國	読 売	毎 日	朝 日		
N = 531	20 5	109	9	22	35	15	28	好意的	①テーマとの関連
	79 5	422	90	65	148	23	96	非好意的	
	0 0	0/531	0	0	0	0	0	どちらでもない	
N = 498	41 0	204	44	47	55	18	40	好意的	②記事との関連
	38 8	193	31	30	76	13	43	非好意的	
	20 2	101	1	10	51	0	39	どちらでもない	
N = 448	33 5	150	25	28	43	13	41	好意的	③社説との関連
	24 1	108	17	24	30	16	21	非好意的	
	42 4	190	4	31	100	0	55	どちらでもない	



(図1) PKO関連「政治漫画」に関する記事量の推移



(図2) PKO関連「政治漫画」に関する「朝日」の記事量

